

思い出

野原, 峯子 / Nohara, Mineko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002634>

思い出

野原峯子

御真影を奉納せらるる壕といふ 病に臥せし恩師を思ふ

一九九三年十二月三日、晩秋の山原路を同僚と出かけた時のものです。

私は中学・高校は勿論、大学で国文を専攻していながら、俳句・短歌を全く作れず、触れもしないで過ごしてしまいました。そんな素人の私が、この二、三年北部の山々の優しい自然に接し、忘れないためにと作った中の一つなのです。名護岳から久志をぬけ、大湿帯を訪れた時のことです。

思えば仲宗根先生にお会いしたのは、一九五九年四月、琉球大学に入学して、方言クラブに入った時でした。その頃の方言クラブは、二代目の部長である、いまは亡き中本正智さんと宜野座嗣郎さんが四年次の学生で、比嘉政夫さんと故照喜名繁夫さんが研究生でした。三年次に大山成子さん、土岐直邦さんがいて、二年次に加治工真市さん、野原三義さん、石川八重子さん、波照間光子さん等がいました。そして同期の大山茂康さん、内間直仁さん、具志堅興秀さん、宇根潤子さん、津波古敏子さん、それに私の六人が入部しました。中本部長はじめ、先輩の方々が、にぎやかに明るくなったと大歓迎して下さいました。

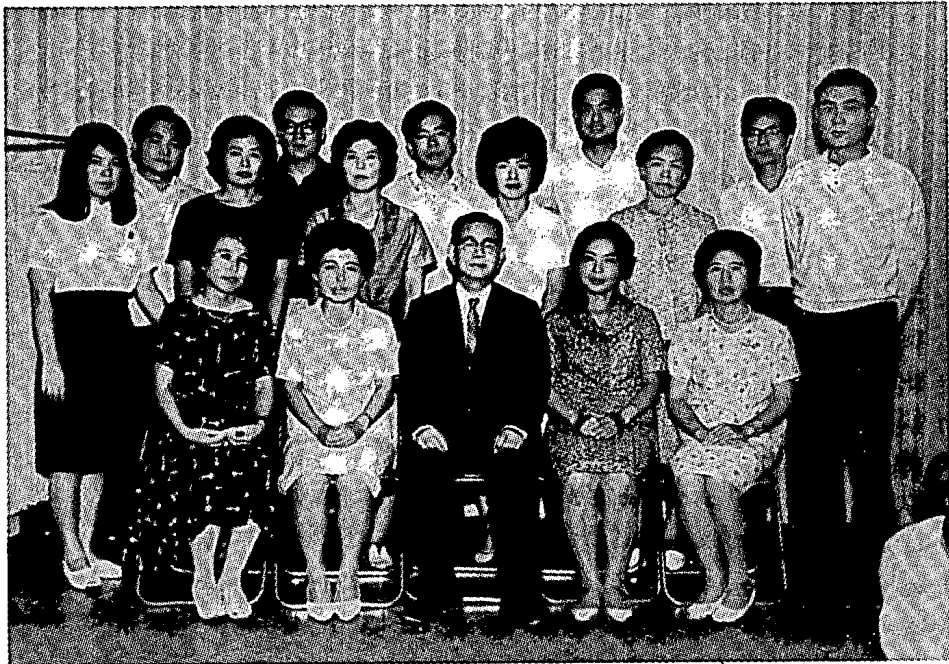
仲宗根先生の指導のもと、クラブ活動を続けたのですが、先輩の成子さんが「相思樹に吹く風」の中で、「大学に行くのは、方言クラブに行くという感じだった。」とおっしゃっているように、楽しい雰囲気が好きで、私も方言クラブが、学生生活の重要な位置を占めていたように思います。

大学祭（と私達は言っていた。）の展示の準備の時、沖縄の地図を何枚も書いたり、調査した方言名を書き入れたり、アクセントのちがいをどんな色で区別しようかなどと、没頭したものです。そんなある日、仲宗根先生はにこにこ私達を御覧になって、「男女が仲良く頭を突き合わせて活動するのはとてもいい事です。」とおっしゃった。先生の中の大きな悲しみなど夢想だにせず、単純に男女共学を喜んでいらっしゃるものと思いました。

三年次に国頭村与那にある琉大の演習林に宿泊し、周辺の方言調査をしたことがあります。昼間の調査について夜ミーティングがあるのですが、それが終ると歌を歌ったものです。

方言クラブ員は歌が好きで、それまでもピクニックや会合、調査の行き帰り歩きながら、よく歌を歌ったものでした。その中に必らず「山のロザリア」があり、いつの間にか「方言クラブの歌」と称して、集まれば誰いうとなく「山のロザリア」を歌ったものです。

「演習林」での調査が終了帰宅する時、仲宗根先生は「味噌・醤油・油など残ったものは、管理人に置くように」と細かい配慮でおっしゃいました。学生は残り物は捨てるにちがいないと分かっていたのだと思います。



一九六二年九月、教育実習の研究授業を、仲宗根先生に見ていただきました。その時私は、古典の授業で平家物語の「扇的」の段をやったのですが、どうしても生徒を活動させることが出来ませんでした。すっかり自信を失った私に、反省会の席で「教えるのは、すぐに上手にならなくてもいい。生徒が可愛いと思う気持ちが大切です。」とおっしゃった。教生の私の授業を見るに見かねて、おっしゃった言葉と思うのですが、その時の言葉は今でも私の支えになっているのです。「生徒が可愛い」と思える間は、教師を続けていいという思いがどこかにあるのです。

学生時代だけでなく、卒業後もずっと、お正月には当り前のように、先生のお宅へお邪魔し、奥様手作りの御馳走を頂きました。家では食したことがないような、金柑を甘く煮こんだものや、小芋入りの煮物、太巻き寿司、大根をひとくちだいに丁寧に取り込んだ漬物など、ど

れもみな美味しいものでした。

仲宗根先生の「古稀記念論文集」の祝賀会で、先生には成子さんが、奥様には私が花束を贈呈することが出来ました。その日のお元気なお二人の笑顔の写真が大切に残っています。

一九八七年方言クラブ三十周年記念誌「琉球方言論叢」が出版されました。出版の際、原稿締切りが近づいてもなかなか書かない（本当は学問的なものは書けないというのが正直な気持ちだったのですが）私に、野原は「先生の所であんなに御馳走になり、お世話になったのに書かないつもりなのか。」と恐い顔で言ったものです。とうとう以前書いた教育センターの授業実践記録に加筆して提出したのが『琉歌』の授業をして」だったのです。

みんなで先生のお宅へ伺った時一言「書きましたね。」とおっしゃって下さいました。それから奥様が「前の方（論文篇）は難しいので、後の方（回顧録）を読んでいますよ。」とにこにこおっしゃったことを懐しく思い出します。

「方言論叢」の祝賀会の日、大勢の人達が駆けつけ、カチャーシーを踊り出す楽しい会となりました。そしてやっぱり最後は「山のロザリア」を歌うことになりました。

その日の挨拶の中で「自前」と言った方が適切かと思うところを誰かが「自腹を切って」と言い笑いが起こりました。それが二次会では、ちょっとした流行語になり「ジバラヲキッテ」とパフォーマンス付きで話はずみませんでした。まさに「自腹を切って」講師の一人、故中本正智さん（埼玉）、内

間直仁さん（千葉）、比嘉実さん（東京）、生塩睦子さん（広島）等が駆け参じたのでした。
方言クラブ縁の人々が集い、本当に楽しいひとときを過し幸せを味わったのでした。
仲宗根先生の細かい心づかいと、素晴らしい思い出に感謝をして終りたいと思います。
ねむれとぞ祈る恩師を見送りて、我はこれから何を祈らん

一九九五年七月